

【地域包括支援センター】

相談業務等に対応にあたって、困難な点はどのような点ですか。

| | |
|----|--|
| 1 | 介護サービス利用者は高齢者が多く、若年のみ利用できるサービスが整っていない。紹介できるのは高齢者の多く利用されているサービスになる。 |
| 2 | 家族が相談に来られる前に、隣近所の人や民生委員等、地域の方々から地域包括支援センターの職員の耳に入っていることが多い。その時差が1~2年ある人もおられる。我慢に我慢を重ねて疲れ果てて相談に来られるのではなく、もっと早い時期に相談にきてもらえるセンターになるための実績作りや力量のアップ。 |
| 3 | <ul style="list-style-type: none"> ・具体的には支障なく、一見悪そうなことがないため、周囲の人からの理解が得にくい。 ・本人自身もおかしいと思いつつ、できないことを認められないため、現役で行っていた家事や仕事への支障に対する援助が受け入れにくい。 ・病気に対する相談やアドバイス、同じような悩みを持つ人との交流の場が近くにない。 ・現在のデイサービス等は高齢者がほとんどで、他の利用者の理解が得られず、本人も場違いに感じるため利用しにくい。 |
| 4 | 本人及び家族の精神的ケア。相談に対応できる制度がほとんどない。 |
| 6 | <ul style="list-style-type: none"> ・相談に来られたのが発症から2、3年経過してからというケースがあり、この件の相談者はその後サービスの利用に結びつかず、専門医を一度受診したきりだった。早期発見、対応の大切さや家族の病気への理解を啓発することがまだまだ不十分であると感じた。若年の場合、家族は認めたがらないことが多い。 ・50代の両親がそれぞれ認知症になったケースがあり、この場合子どもが家計を支えていくことになっているのだが、収入が少ないため、本当に必要なサービスが受けられない状態にある。また、精神面・生活面での負担が本人・介護者ともに大きい。安心して相談できる所が少ない。 |
| 8 | 介護者への支援が専門的・継続的に必要なこと。本人の混乱状況への対応が必要なこと。地域や兄弟(親戚等)の理解が得られないとき。 |
| 9 | 若年認知症を対象とした専門デイ、または若年認知症に対応できるデイが市内にない。また、啓発が不十分で地域の中で支えていけない。 |
| 10 | 本人の状態をみて認知症のHPを紹介するところまでもっていく過程が難しいが、その後の資源のなさに家族と途方に暮れる。徐々にいろいろなサービスや機関との連携をとりつけるが・・・。 |
| 12 | 問題の把握が遅れること、地域の理解、サービスの調整が困難であった。 |
| 13 | 相談窓口が明確でなく、周知ができていないため、相談時期が遅れ、対応困難な状態になりやすい。若年者に対するサービスがほとんどなく、支援方法の選択肢が少ない。若年者で仕事の継続が困難で、経済的に苦しい家庭が多い。若年者で家事ができず、家庭内に及ぼす影響が大きい。若年であるため、本人・家族の病気の受け入れができず、精神的フォローが難しい。 |
| 14 | (がんで脳転移から認知症のあるケース)介護保険と障害に共通してあるサービスを利用にあたって、診断名により申込の窓口が変わることで利用の時期が遅れてしまうことがあった。独居のケースで、家族として後見人の希望がないものの、その家族ともコンタクトが取りにくい場合の相談の進め方。若年性のため家族や親族等が疾病の受容ができないため、相談者と接近拒否になることがある。別居の親族が本人の財産を守ろうとするあまり、本人が築いてきた人間関係に制約をかけ、それがもとにその人の生きがいや希望までも失われてしまうケースがあり、家族の思いと本人のQOLを調整することの難しさを感じている。 |
| 15 | 見守りサービス、預かりサービスがない(適正なサービスがない)。 |